

特集2 対談 戦後73年 私たちは どう生きてきたのか

海老坂 武 (フランス文学者)

本野 義雄 (本誌編集委員)



国会前の畑で芋を掘る議事堂職員たち

放棄」と訳したんですよね。

村山首相の国会での決議(*)、あれも不戦の誓いとして出そうとしたんだけど、確か不戦という言葉を選けたんだな。しかし今日の新聞(8月16日)でも昨日の戦没者追悼式について不戦云々と書いてあるでしょ。そういう意味では「不戦」という言葉は広がっている。

「反戦」というのは自分に関係なくともよそでやっている戦争であっても「反戦」といえるわけです。例えばベトナム戦争を非戦運動といえるかというと、そうは言えないでしょ。やはりベトナム反戦だ。

ところで本野さんは戦後すぐに東京へ帰ってこられたの？

本野 そうですよ。46年9月2日に疎開から帰ってきたの。1年と1週間って覚えてるんだよね。その時家族が富士山のふもとにある富士宮に疎開してたので、そこに戻った。

海老坂 僕は45年の10月くらいに東京に戻ってきたんだ。富山県の高岡から汽車に乗るんだけど、超満員なんですよ。席はかろうじて取ったけど、トイレの入り口まで人が座り込んでいてトイレに行けない。で、駅に止まると窓から出入りしてる。

一晩かかって東京に着いて、僕のところは武蔵小山と学芸大学、昔は第一師範といったのかな、その中間にあるんだね。学芸大学で降りたら、焼け野原。バラックがすでにありましたね。歩いていくうちに自分の家の一角が見えてきてね、僕の家は焼けてなかったんです。

で、父親が失業したので新橋の闇市へ行くつてものを売った。僕は学校がまだ開いてないので父親にくっついて行きました。目黒の権之助坂から新橋まで自転車で1時間くらいかかってね。2カ月くらい父親を手伝ったかな。戦後の感じというのは僕にとってすごく明る

——お二人は子ども時代に終戦を迎えたわけですが、その時「自由」とか「民主主義」を感じましたか？ また海老坂さんは1996年から非戦についてふれていましたが「非戦、反戦、不戦」、この3つの違いをもう少し詳しく教えていただけますか

海老坂 「不戦」というのは、以前に不戦条約というのがあったって、1928年のケロッグ・ブリアン条約かな。それを日本では不戦条約と呼んでいる。その不戦条約の「不戦」を英語で何というのかと調べたら、Renunciation of Warというんです。面白いことに憲法第2章の「戦争放棄」、あれも元の英語の題名では Renunciation of War なんです。それを「戦争

戦」の違いは何かというと、「不戦」というのは不戦の誓いなんだからお互いにといい感じがある。お互いの国、あるいはお互いに我々が、しない。わだつみ会の場合はそうでしょ。我々はもう戦わないという決意がわだつみ会ですね。一方、「非戦」というのは我々じゃない。「非戦の誓い」というのは可能かもしれないけどあまり言わないでしょうね。「非戦」というのは自分がしませんよということ。それは国の場合には我々の国はしませんよということになるし、個人の場合には私はしませんよ。そういう違いがあるんじゃないかなと僕は考えています。



特集2 私たちはどう生きてきたのか

いんですよ。自由や民主主義というのと少し違う。とにかく何をやってもいい。そういう自由感がありましたね。それが

れから小学校の5年か6年の子供なんだけど、闇市で大人みたいな顔ができるんです。もの売ってお釣りもらって、近くの屋台に行っ一緒に飯食って。そんな明るさがありましたね、僕にとつて。

——疎開から戻ってすぐに新制中学に行くわけですが、それまでの中学と違っていましたか？

二人 全然違うよ。

海老坂 校舎がないんだから、新制中学というのとは。

本野 青空教室で、新制中学も第1年だった。僕の場合は校舎はあったけど。

海老坂 3つの小学校の校舎を借りて授業をやって、先生もいないからいろんなところから集めてくるわけ。若い人ばかり。つまり中年の男はみんな死んじゃってないわけじゃない。中年の女の先生もいなくて、いるのは年寄りと若い男女の先生、なかには大学生もいた。昼間は先生をやって、夜は夜学に行くと言っていた。だから先生との関係は最初の頃は友達みたいで、しょっちゅう一緒に遊んでいましたね。

本野 6年生のとき担任教師が組合をやっている日教組だった。ちょうど2・1リスト(1946

年)の前で、すごい活動家だったわけだ。で、学級新聞があつて、そこに教員ストの記事を載せたの。教師がなぜストライキをやらなきゃならないのか。それを学級新聞に書いて、やさしく説明してくれた。

海老坂 大人の世界と子供の世界がすごく近いんですよ、あの時代は。もろに大人の世界とつながっている感じがありましたね。だって中学校では、学校の廊下にスピーカーがついていて東京裁判のラジオ放送を全部流したりするわけですよ。誰が死刑になったかどうかのつて。

本野 それはすごいね。

海老坂 そうだね。それは校舎ができてからだね。

本野 ちょっと話の脈絡がなくなるけど集団疎開に行った先で、8月15日にぼくが体験したことをちょっと話しておきたいんだよ。集団疎開というのはご存じと思うけど、子どもたちはいくつにも分かれて温泉旅館に収容されるわけね。その日は一カ所に集められてピーカーガーというラジオの前に座らされて、でも結局天皇が何を言ったのかわからなくて、どうせまた最後まで頑張れという話だと思つて帰ってきた。そうしたら大人たちの様子がちょっとおかしい。女の先生が泣きながら走って出てきたり、おかしさが子供にも伝わったんだけど、それでもその日は我々には何も知らされなかった。

次の日にそれこそ生徒全員が集められて、

そこで男の教師が立って「戦争が終わった」と言つたわけね。日本は負けた。そしてなつて言つたかというところから文化国家として新しい日本を作んなきゃならない」とつていう意味のことを言つたんだ。文化国家ってなんだ。我々のボキャブラリーになつた言葉だ。みんな何言つてんだかわからなかつたわけ。そしたらそのあとに女の先生が立って「みんな、〇〇先生はあおっしやつたけど、でも皆さん、アメリカとイギリスに仇を取ることを忘れてはいけませんよ」。それはみんなよくわかつたからワァーって拍手したんだ。それだけよく覚えてんの。前に立つた男の先生は何かいいこと言おうと思つたに違いないんだね。それにしても文化国家という言葉あつたかな。

海老坂 8月16日にすでに文化という言葉出してたのはすごいね。

本野 それから2週間後に富士山麓にある親の疎開先に行つて、その小学校に入ったわけね。国語の時間に『水兵の母』というのをまだやつてんだよ。『水兵の母』って知ってる？

海老坂 知らないね。

本野 修身の教科書だったかな。軍艦の中で水兵が母親からの手紙を読んで涙をこぼしているのを上官にとがめられる。お前はなんで泣いてる。彼の手紙を見たら「お前の命は天皇陛下に捧げた。親と思うな。私は子供とは思わない」とそれはすさまじいことが書いてある。上官はそれを読んで感激するという馬



鹿げた話なんだ。それが終戦後3週間経っているのにまだ使ってた。

ところがその次の週に学校へ行ったら、先週にやったところを墨で塗れって。でも墨を塗ること自体は良い気持ちだったね。なんか当然のような気がした。ということも天皇主義のイデオロギーは子供の頃には、それほど浸透してたわけじゃないんだ。

海老坂 ところで(高橋)武智さんと友達になつたのはいつ頃から？

本野 中学3年。一緒に文化祭で出しものやって。菊池寛の『父帰る』。僕が次男の役、彼が女形。

海老坂 それ以来、仲良くなったの？

本野 仲良くっていかね：これには長い話があつて。日本共産党ですよ。

海老坂 そこがたぶんね、新制中学と旧制中学は違うんですよ。旧制中学には共産党の細胞があつたんですよ、きつと。

本野 上級生に共産党ファンが多かつた。野坂参三という転向してないスターがいたしね。なんとかクラブって感じで5人くらい集まつて、学校の帰りに近くの公園で細胞会議(笑)。

最初にやった仕事は『下山、三鷹事件の真相』という1冊10円のパンフレットを売った

あつて、そこを1軒1軒売って歩いた。けっこう売れたよ。

海老坂 当時学校の中のラーメンが30円だったからね。

——それは誰が書いた本ですか

本野 日本共産党出版。そのうち朝鮮戦争が始まっちゃってさ、GHQが共産党の幹部を追放して『赤旗』を発禁にしたわけ。『赤旗』が発禁になったら名前を変えて、『人民の友』みたいな新聞を出した。それもすぐ発禁にされ、また別の名前を出す。次から次へと新しく『赤旗』と同じような新聞が出るわけ。それが細胞に届くわけだね。それを配布しなくちゃいけない。これが一仕事でさ、第一そういうのを持つているところをほかの友達に見られたらまずいじゃない。それを5人の仲間

に配ったわけよね。ひとつの冒険なんですよ。——朝鮮戦争の頃は、戦争をやっているという雰囲気日本でもありましたか？

本野 ありましたよ。

海老坂 ただね、あの頃は反戦運動というのはできなかったんだ。

本野 でも僕らは少しはやつたよ。『我が友に告げん』というパンフレットを売ったんだ。イールズ事件つてあつたじゃない。東北大学でアメリカの教育学者のイールズ教授が共産主義はいかに危険かとレッドパージ支持の講演をしたわけ。それに対して学生が抗議して騒ぎになり、捕まった学生たちが軍事裁判にかけられた。そのいきさつを書いたパンフレット

トだけど、これはパンフレットとしては売れに売れたんだよ。麻布でもずいぶん売れたね。やっぱり警察予備隊のこともあつたし、我々また徴兵で駆り出されるんじゃないかという危機感があつたからね。

海老坂 そうそう、徴兵に対する不安は決定的よ。それはね、高校時代にすごくありましたよ。ぼくら雑誌をつくって、徴兵になつたらどうなるんだというアンケートをしたことあるけど、とにかく徴兵というのは現実的なこととしてあつたんですね。

今は、ぼくは徴兵制はないと思つてんの。というのは、徴兵制の兵隊なんていま役に立たないんですよ。もう専門化してね。だから世界的に徴兵はほとんど廃止して専門の軍隊を強化している。徴兵やることに意味があるとすれば、それは全体をひとつの国にまとめようとす精神の意味しかない。いまみんな徴兵制を警戒しているけれども、あのころに比べれば全然ないと思つてます。それよりも愛国イデオロギーを振りまいてくる方を警戒したい。

—— 当時は徴兵に対する危機感がすごくあつたのですね

本野 ノート回覧したな。ノートに書きたいこと書いてサインして次へ回す。そうやって要するに意見交換をする。

海老坂 警察予備隊ができて、軍隊には金がかかるじゃないですか。しかし、それでも徴兵のほうが安い。そういう感じがあつたんで

すね。

本野 前の戦争であれだけだまされて、もう一回だますつもりかというすごい反感があったね。今度はごめんだって感じがした。

——でも経済はそのときずいぶん上向いたんですよ

本野 でもこっちは関係ないよ。

海老坂 そう。朝鮮戦争で日本の景気が良くなったとか、高度成長でどうのこうのって言うけど、あれは要するに企業がどうのこうのって。普通の人間はなかなかそうはいかない。

本野 爪に火をともしつつ生活してたわけで。毎日弁当持ってきて、昆布の佃煮だけがかかっていて、そういう生活だね。

——お二人が出会ったのはベトナム戦争のときですか？

本野 1967年暮れに「イントレピッド4人の会」というのが発足して、そこがジャテックの表看板として機能していた。そこに海老坂さんがいたわけ。機関紙『脱走兵通信』の記事を書くのは主としてわれわれ先端の活動者で、その編集と発行と発送を毎月、16回発行したかな。その後ジャテックの「方針転換」があって、それ以後「ジャテック通信」として7回発行した。

海老坂 最初はものすごく寄付が集まった。

本野 そう、寄付を送ってくれた人に送った。**海老坂** あつという間に何十万（いまのお金にすれば何百万）という寄付がきて、だから何部刷ったか覚えてないけど1000部近く刷ったん



「イントレピッドの4人」（1967年 べ平連製作）より

じゃないかな。

本野 もっと行っただんじやない。新聞出すことによってまた増えたからね。Nさんの提案で始めたんだよ。金を集めようって。彼とぼくが交代で編集をやりました。奇数番号はぼくがやって、偶数番号を彼がやった。

海老坂 ジャテックを最初に実際にやっていたのはKさんでしょ。そのあとを次いだのが武智さん？ そのときにあなた方が一緒にやってたの？

本野 ほくは68年からだからKさんの下だ。

Kさんの下で何月何日に預かってくださいって脱走兵を引き受けて、1週間なら1週間預かって、また別のところに送り届けて、そういうことやってたの。最初は家を提供するという、それだけ。そのうちに場所が足りないということがわかって友達とか知り合いを訪ねてまわって、預かってくれる家を探すようになった。それが始まりだな。

海老坂 講演会をしてお金を集めようと、当時お茶の水にあった日仏学院のホールで日高六郎さんなどを呼んで講演会をやったら500人くらい人が来たんですよ。そのくらい人が集まったの、あのころは。皆燃えていたんだね。

本野 よく人が集まったよね。何やっても集まった。

海老坂 岡部伊都子さんというエッセイストがいたでしょ。あの人は何回も何回も寄付してくれたよ。

本野 そうそう。

——みなさんの世代は子どもの時に戦争体験をしているから徴兵制に対しても危機感があるけれど、今の若者にとっては戦争が遠いものになっているのでしょうか

本野 遠いも何も想像がつかないんじゃない。

海老坂 でも今の戦争は昔の戦争と比べて比較にならないくらい怖いでしょ。ということではテレビなんか見れば分かると思うけどね。昔は飛行機が来て爆撃されたって、逃げられるっていう感じがあったけど、今はないでしょ。

本野 そういう意味からいうと昔の10倍くらい、もしかしたら100倍、1000倍かもしれない。

海老坂 いや、だけど3・11以後、久しぶりに反原発のデモが起ったじゃないですか。それまでイラク戦争のときに少しあつたけれど、80年代なかばから90年代まで街頭のデモってなかったでしょ。それから第2次安倍政権以降、軍事化社会に向けたいろんな法律がパンバン出来て、それ以来デモが続いている。これは注目していいことだと思いますよ。2、30年なかったんだもん。そこに希望を持つ以外ないですよ。

本野 結局年寄りが若者に働きかけるのを失敗してるんだよね。

海老坂 でもねえ、戦争体験の伝達って、昔からよく言われてきたけど、それはそう簡単にできるもんじゃないって僕は思う。戦中世代の鶴見俊輔さんなんか戦争体験を後の世代に伝えようと一生懸命なされてたけど。自分が何かを感じて、ああそうかそういうことを学ぼうという気にならない限りダメなんで、世代から世代への伝達というのはスムーズにいくと思わないね。だいたい、上の世代には反発するじゃないですか。若い頃ぼくなんかすごくあつたしね。

本野 僕ら自身が伝達されてないもんね。軍隊体験のある人の話なんか聞いたけど、嫌だなあと思うだけで、僕らが戦中世代の何を受け取ったかという嫌悪感しかないもの。ま

だ嫌悪感があるだけいいのかな。その先は何もない。

——韓国では「平和センター」という活動拠点があつて、そこから文化として平和運動を発信しているんですが、日本も同じように「拠点づくり」をするべきだったのではないのでしょうか

海老坂 「場」と言ってもいいわけですよ。だから「市民の意見30の会」は「場」じゃないですか。「場」をもっと活用したらどうなのかな。イベントを企画しないさいよ、イベントを（笑）

本野 そこへ行って無駄話をするだけでも違うという。ベ平連にはそういうものがあつたわけ。けっこう無駄話をして酒飲んで。

海老坂 昨日も8・15集会でそういう話をしたんだけどね。

——ところで戦後73年を経て時代の変遷をどう思われますか？

海老坂 それこそ80年代に日高さんが言っていたことだけど、戦争中は「滅私奉公」だったが今の時代はひっくり返って「滅公奉私」になつてる。すべて「私（わたくし）主義」になつてる。それでいいのかどうかということですよ。鶴見さんなんかは「私主義」でしょ、全部それでいけと言わうわけ。確かに公の意識というのが60年代、70年代、だんだんと薄れてきて「私」ですよ。

ただ、「私」のなかにもなんとというか、たんに欲望に流れていく、消費にながれていく意識とそうでない「私」があると思うのね。つ

まり「公（おおやけ）」に対抗する意識というのがあるはずで、それがやはり弱くなったということがあるでしょうね。特に60年代というのは世界的に欲望が大手を振っていた時代で、フランスの5月革命なんてのは欲望の爆発という面がありますからね。

欲望こそ時代を変えるという時代があつたんだけど、そういう欲望がだんだんと囲い込まれていって、要するに資本主義社会というのはそういう欲望を囲いこんで次々に形を変えていって消費に導いていく。だけどそうでない「私」というのがあるはずで、ベ平連の反戦というのはそういうこと。「私原理」でもって国家の原理に対抗するという発想があつたんだけど、そういう「公に対抗する私」というのが減っていったというのがありますよね。それをどうやって活性化するか、ということが本当は市民運動の課題だったんじゃないかというふうに思うのね。

「私」を否定するのではなくて「私」のなかにある「公」を活性化するというふうに理屈では考えられるんですけどね。じゃあそれを具体的にどうするのか、ということでは僕は一生懸命イベントを提案してるんだ（笑）

*歴史を教訓に平和への決意を新たにする決議…1995年、村山内閣のもと終戦から50年の節目として先の大戦を総括する決議を国会で行なった。

（まとめ…細井明美／本誌編集委員）